

ポニーを用いた特殊学級の子どもたちへの指導

飯島 友子

(茨城県鹿島郡大洋村立白鳥東小学校)

1. 大洋村立白鳥東小学校の概要について

本校は、茨城県南東部の太平洋に面した自然豊かな地域である。学区は、南北4kmにわたり、国道51号線に接した交通量の多い地域である。鹿嶋方面の会社に勤務する保護者が多く、農地が住宅地に変わりつつあり、他市町村からの入居者が増加傾向にある。

保護者の教育に対する関心は高く、学力の向上、心の教育の高揚に大きな期待感をもっている。

児童数が185名の中規模校である。学級数は、9クラスある。通常の学級が7クラスで、特殊学級として、情緒障害学級「こころの教室」と知的障害学級「学び方教室」の2クラスがある。子どもたちは、明るく素朴であり、思いやりの心が随所に見られる。草花や生き物を大切に、勤労・奉仕活動へ積極的に取り組む姿が見られる。また、外遊びなどの運動を好み、活動的である。学習面においては、実験観察や体験活動には、意欲的に取り組んでいる。

2. ポニーを用いた指導を実施することになった経緯

平成10年4月より大洋村の健康増進課施設『とっぶ・さんて大洋』の施設内に、ポニー広場の整備を開始し、同年6月に、『たいよう馬の杜』としてポニー事業を開始することになった。これを受けて、平成11年度からポニーとのふれあいや乗馬・世話等とおして、障害をもっている児童が自発的にポニーや人とのかかわりを高め、社会性や対人関係の育成を図ることをねらいとして、実施する運びとなった。

また、専門研究機関である国立特殊教育総合研究所の「乗馬療法」の考え方を受けながら、活動を進めることで、そのねらいとするところの「馬の特性を活かした心理・教育的な対応」を本学級の児童にも味わわせたいと考えた。さらに、余暇活動のひとつに取り入れたり、『たいよう馬の杜』が、地域社会での活動の場のひとつになるようにさせたいと思い、ポニーを用いた指導を実施することとなった。

3. 教育課程での位置づけ

こころの教室の教育課程の中の「小集団の時間(自立活動)」での4単位時間を1回として、カウントしてきた。

その時間を「ポニーとあそぼう」の名称の学校行事として、実施してきた。

4. 「ポニーとあそぼう」の3年間実施期日

(1) 平成11年度(9回)

・5月11日・15日 ・6月5日 ・7月3日
・10月2日 ・11月6日 ・12月4日
・1月12日 ・2月5日

(2) 平成12年度(6回)

・4月8日 ・5月19日 ・6月20日
・10月18日 ・11月9日 ・12月15日

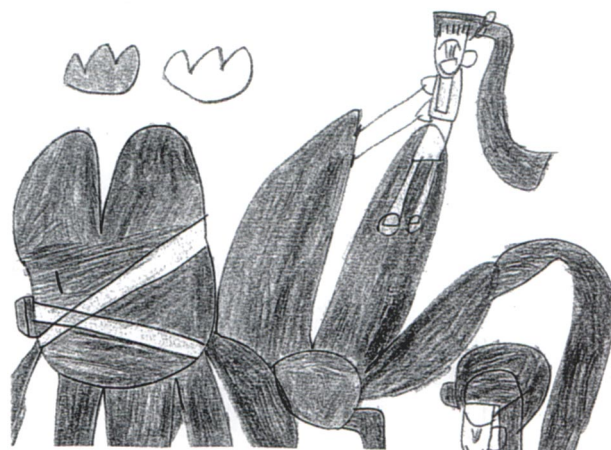
(3) 平成13年度(6回)

・5月11日 ・6月11日 ・7月17日
・10月26日 ・11月22日 ・12月18日

5. 「ポニーとあそぼう」についての実施体制

情緒障害学級担当者が中心になり、知的障害学級の協力を得ながら、実施してきた。『とっぶ・さんて大洋』のスタッフにも恵まれ、『乗馬療法』を取り入れながら、ポニーへの接し方を児童が理解できるように親切に教えてくださった。

『とっぶ・さんて大洋』が学区内にあるという、立地条件も時間のロスが少なく、実施する上で大変都合がよかった。以下の「学校行事計画書」とおりに実施してきた。



絵1

〔資料1〕「学校行事計画書」

- ① 行事名：ポニーとあそぼう
- ② 立案者：飯島 友子
- ③ 参加児童：こころの教室在籍児童 3名
 学び方教室在籍児童 2名
- ④ 配当時間：小集団指導（自立活動）4時間
- ⑤ 実施期日：平成13年5月11日（月）
- ⑥ 場 所：とっふ・さんて大洋
- ⑦ 輸送移動方法：とっふ・さんて大洋のワゴン車
- ⑧ 経 費：0円
- ⑨ ねらい：
 - 継続してポニーに乗ったり、一連の世話をする中で児童が自発的にポニーや人とのかかわりを通じて社会性や対人関係を図ることができる。
 - 専門機関である、国立特殊教育総合研究所の乗馬療法を受けることにより、そのねらいとするところの「意欲に基づく実現と充実」を図ることができる。
- ⑩ 実施計画

活 動	教師の支援
◎ 事前指導 ・ねらいについて ・各自のめあてについて ・集合について ・諸注意	ねらいについて十分に話し、各自がポニーとの自発的なかかわりができるように、各自のめあてを確認して、活動意欲を高める。
◎ 活動計画・予定・内容 8：40 昇降口集合 8：50 学校出発 9：00 とっふ・さんて大洋到着 9：10 ポニー学習開始	こころの教室に全員集合させ、健康観察をする。 『たいよう馬の杜』のスタッフに心を込めて挨拶ができるように声かけをする。 ・かかわりあい行動への支援をする ・学校担当者は、『たいよう馬の杜』のスタッフの指導を受け、児童を見守る立場で参加する。 ◎「場の提示」 ・人やポニーへの関係づけ ・ものとの関係 ◎「人へのかかわり」 ・動きへの対応 ・ポニーをとおした働きかけ ◎「動きの提示」 ・動きの受容
11：40 ポニー学習終了 11：45 とっふ・さんて大洋出発 11：55 帰校	スタッフにお世話になったお礼の挨拶ができるように声かけをする。 こころの教室で各自のめあてについての反省をする。
◎ 事後指導 ポニーとの活動した思いを絵や文、ことばであらわす。	次回も行くのが楽しみになるように、ポニーとのふれあいを思い出させる。

⑪ 備 考：引率は特殊学級担当者の2名で行う。

6. 指導計画

（1）児童の実態

平成11年度と平成12年度には、こころの教室に在籍している児童は、5名であった。中学校へ進学したり、学び方教室へ措置換えになったりして、平成13年度は、3名の学級であった。自閉的傾向の児童が2名、場面緘黙の児童が1名である。4学年と6学年の異学年による構成である。

知的発達についても、中度から軽度の遅れが見られる。また、情緒障害の特性とされている、対人関係や社会性の障害、言語やコミュニケーションの障害、興味の限局性や常同的・執着的行動についての発達障害や行動異常も併せもっている。学び方教室に在籍している2名も一緒に参加して、3年間、活動を共にしてきた。なお、「平成12年度のこころの教室在籍児童」の実態については資料2に記載した。

さて、どの児童においても「ポニーとあそぼう」が、大好きな時間で実施日を心待ちにしていた。やはり、ポニーとふれあうことによって、「こわい」から「かわいい」に変わってきたのだらうと思われる。学校に帰ってきてからの「ポニーの思い出」の絵や作文に、情緒の安定が図れたと思える表現を見せてくれた。『たいよう馬の杜』のスタッフの方々との交流も楽しい時間のひとつになったと思う。活動の合間の休憩時間には、学校での様子や考え等を自然に話をする姿を見ることができた。



絵 2

(2) 指導のねらい

障害をもっているために、本来もっている力を十分に伸ばしきれない児童に対して、その障害の状態、程度を改善することにより、学校生活及び社会生活への適応を高め、たくましく生きる力の育成を図ることをねらいとする。

《障害児にとっての「たくましく生きる力」とは》

◎ 学校生活を生き生きと過ごし、将来、人とのかかわりを持ち、社会に対して積極的に働きかけ、自立した生活を送ることができる力（社会的自立）

《たくましく生きる力とは》

◎ コミュニケーションの開発

◎ 健康と体力の向上

《身につけさせたい力》

◎ ものを知り、ものを学ぶ力

- ・注視
- ・傾聴能力
- ・模倣能力

◎ 人を知り、社会を学ぶ力

- ・人とかかわる力
- ・言語理解力
- ・言語伝達力

◎ 身体を知り、身体の使い方を学ぶ

- ・調整力
- ・筋力
- ・持久力
- ・歩・走・躍の力
- ・健康を意識する力

(3) 指導の内容

児童ひとりひとりの情緒の状態・能力・特性に応じた指導目標を立てる。児童がより積極的に学校（社会）生活に参加できるように、自立活動（心理的適応と意思の伝達を中心に、必要に応じて他の教科も考慮する。）及び、各教科の補足的指導も行う。

「ポニーとあそぼう」の活動を通して、主に6つのことを重点的に指導していきたいと考えた。

① 対人関係・社会性

- ・対人関係の育成
- ・社会的スキルの向上

② 行動・情緒

- ・心身の障害や環境に基づく心理的不適応の改善

③ コミュニケーション

- ・意思の相互伝達の基本的能力の習得
- ・言語の受容・形成・表出能力の向上

④ 認知・学習

- ・認知の枠組みとなる概念の形成
- ・各教科の補足的指導

⑤ 運動・動作

- ・姿勢と運動・動作の基本の習得及び改善
- ・手先の巧緻性及び遂行能力の向上

⑥ 生活習慣

- ・生活のリズムや生活習慣の形成

(4) 指導の記録と評価

児童ひとりひとりのポニーとのかかわりの様子を毎回、観察しながら記録してきた。同時に、写真やビデオカメラでの撮影も行ってきた。保護者へもその都度、連絡帳で様子を記載してきた。毎学期末に通知票へも「ポニーとあそぼう」での取り組みの状況を伝えてきた。

活動の評価については、次のようなことを考えてみた

- ① ポニーとのかかわりの中で、素直な気持ちをどれだけ表現できたのか。
- ② ポニーとの体験活動において、どれだけコミュニケーションをとることができたか。
- ③ 今までの活動で習得したことを踏まえて、自分で考えながら、次の行動に移せたか。
- ④ 各自のめあてを達成することができたか。



絵 3

7. 実践報告

以上を考慮して、『たいよう馬の杜』のスタッフの方が

その都度、活動内容を決定して児童とポニーをなかよくなるように、スモールステップによる計画を立ててくれた。

主な活動の流れは、次のようである。

- ① 集合、挨拶、注意と今日の活動の説明
- ② ボロ取り（馬小屋・放牧場）
- ③ ブラッシング
- ④ 蹄掃除
- ⑤ 乗馬の準備
- ⑥ 引き馬、乗馬
- ⑦ 後片付け
- ⑧ えさやり
- ⑨ 集合、感想発表、挨拶

はじめは怖がっていた子供たちであったが、回数を重ねるごとに、充実した活動ができた。『ポニーとあそぼう』の活動をとおして、本学級の児童が大きく成長する姿をまじかで目にすることができた喜びを感じている。3年間の長期にわたる活動を通し、児童の心身の成長とポニーとのかわりでの成長が重なり合ったのだと思う。

さらに、『たいよう馬の杜』のポニーに赤ちゃんが、誕生したこともあり、ますます、楽しい活動になったことは、間違いない。学校以外の人とのコミュニケーションをとることができるようになったことは、こころの教室の児

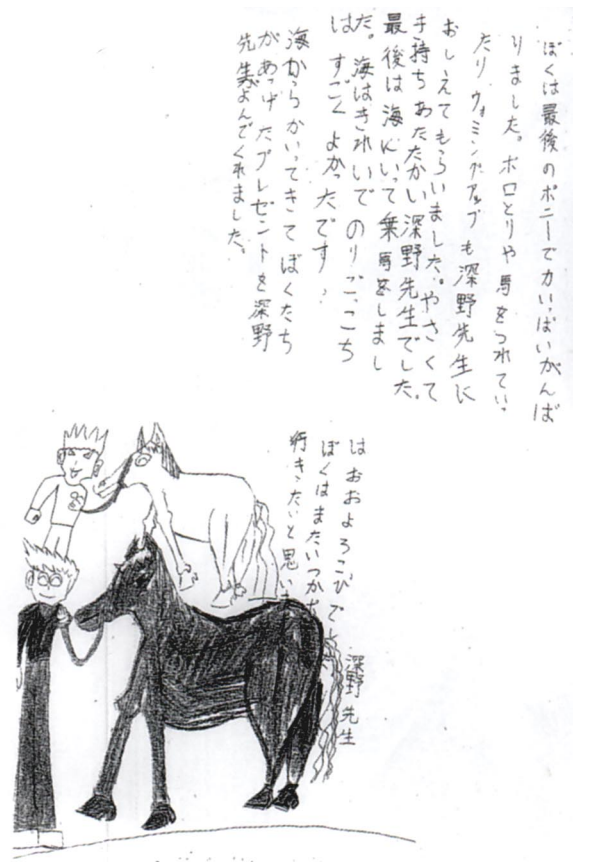
童にとって、素晴らしいことである。つまり、こころの教室にいるときと同様に、ポニーと一緒にリラクセスできる空間になってきているということなのだ。ポニーを引いても、乗っても、ボロ取りをしているときもどの子の顔の表情も輝いていた。満面の笑顔の中に、ポニーに対する児童の気持ちが現れていると思った。馬小屋の中や丸馬場にあるボロ取りの作業に対して最初の頃は非常に嫌悪感を示しながらの取り組みであった。しかし、今ではみんなで協力しながら、たくさんのボロを集めて、袋に入れられるようになった。これは、ポニーに気持ちのよい場所でも過ごしてもらいたいという、思いから自主的な行動がとれるようになったのではないかと考えられる。

準備や世話の活動に対しては、あまり積極的でなかった児童でも、乗馬は大好きでひとりで乗れるようになった。ここにも、ポニーとなかよくなりたいという思いから、指示をよく聞いて、乗馬の仕方を習得していったのではないかと思われる。

乗馬の後に、お礼としてにんじんをやる作業に対しても、怖さからなかなか手の平から与えるまでには時間がかかった。自分たちで大きなにんじんをナイフで小さく切ったのをあげたときから、怖さが半減したようだ。にんじんを喜んで食べているポニーを見て、一緒に喜んでる児童の姿があった。



絵 4



絵 5

活動した思い出を表現する絵（絵4、5）を見ると、明らかにポニーを意識して、より本物に近い表現になってきたことが分かる。ポニーの周りの情景も描けるようにもなった。これは、ポニーの存在が児童と密着してきたことだと、思われる。

8. 実施上の課題

- 一連の作業に抵抗を示す児童への支援の仕方をどうするか。
- 乗馬の時間に待っている児童の活動をどうするか。

- 学校側（特殊学級担当者）のスタッフへの協力の仕方の研修の機会をどうするか。

9. 今後の課題

平成14年度からは、こころの教室の在籍児童が5学年だけの1名となり、単独校での事業実施が難しい状況にある。本校を卒業して、大洋中学校に進学していく児童が多いことから、体験事業を継続できるよう村内の特殊学級の取り組みとして実施する方向で考えていく必要性が生じてきている。